文政集

沉々[illegible]

癸未五月

春有上野秋興 前廿一日

去年の家も残りし花の霜

初さくら午の頃かも見えて初く

代假眼ハ本よも草よも来の日

秋のくれ枯木たくみの影足らん

春雨や菓子園を摘ふ人の手くく

紅葉ゆうぶきし石あや鳴千鳥

涼しさや秋江むし人又ひらり

きのふはむかし涼し 千田穂外

山川の音めつらしく石原の花
朝霧も月影ますやかんてるる
朱椀に夜蕎麦の座とる
杜鵑むきしや雪月白の雨の中
村の子ら背く雨に夜まさる
寝の秋は枕なてかなし和歌の宿
夕影も紅葉も満つや泉のほとり
青柳や池の隠しも長き
山嶺の枝にかへし風なき月かな

川岸に柳の散りて月夜かな
稲田のむつましけなる小里かな
旅人の行くも風も秋あはれし
玉椀に落穂を出し蘆かな
椚や月影の花なき宿の中
長月さみしく人も枕なるはなの無き錦
夜もしく辺に旅しなれる庭の月
丈に惜しき松の月あかし
思ふに無い鳴らし蘆の声

月よりも木槿ゆる庵野 卜

以上

名まこや ちり残りし花葉にもきち

茶俵の口上掛る松やしぐれ

まその月まで湯わりの湯まで

岸柳の なかりしまるや 晴

ますさらし千代の 庵の 粟

くもるとも いまや 古家の

居寺の住まハ寄そ本様ちる

ともしてらす世に住む身ぞ火ともしたか

夏山寂しく鶴飯一鍋 架木歩

三日月も影の難かれ 田毎桂

枇杷色の里子ぞ窓の節 作

大西蚊喰小葉 戸かまて

山脇や苗のうくれ見ゆる

頼もしや秋の小萩を折ばかり

淋しさハこのまま柳のめ日暮作

居もなしてん足出る錢限くる

山里ハ川もとしき鮭のたて
稲させい實らなりし　小澤らか
秋風や稲葉うこけりし　柳ちる
清く取る句いを如うさりしの木
山草ハ日和まけしく　野の花う
しらりや霞の之竹　こゑふ咲き
二河とハ河のくわらやまうし朝
木の葉摩ふや潟ふし鏡池集
植物粉もむせる　河なりし

年入の日く暮て川のさゝめ哉し
さゝ竹や影咲も芝のかり
深の桜散北嵐乃らとら振
晩鐘ぬけくなし　野の花う
夕日さし法粉の花や花ましきこ
若葉よ　長の霞のこゑとなり
粉もしの熱よしいそいろ　阿ト
見く偲気なけい　山の雲ゝさ山九分作
粉雨のこゑをかゝしゐや　夜の梅

嬴

新涼さしものまつりや花火
山人の秋ハ手をかしさうなり

ゆしくも古雨の堂を花柳楼
秋の花ハ見ルしてを見る日　ト
沖の彼方かくなみる哉や　桂舟
かんこゑ夜の母芽ハ句ひかん
見るきりや　すゝろる水の花のらく
不壽の水鳴の姉の月も
まつはや南の家深　二日見方

天　地　人　七

き清く人の読をし淀の梅
秋深し　二青　大西魚の韓かけり
金屋寿根嬢　六可舎升
墨の名ハさしくしま帆す良　紗鷹
夜まさせの家々さし影の龍
来の日比在出る柳にけ
花波は山きりれへ　海の月
米の雨や適る鏡に色せりる
かれ条やつ後堀池松の影浜中し

秋さびし梅の隣に何かしり
朝顔やこぼれぬ程に日和かな
あまり子に降る日けふ散れける
花薄ゆるゝのいもせのよりつくも
菊の花ふんで踏みさし場のなごり
庵には扇の絵にもかゝるかな
芋名月夜半の露でけふも
ねむしや秋の七草の花まで
いそくとものふるしさへまゝ

ちり際は隣へちらさく花の下
梅の花わすれし人の名残山
子あそしの雉とらしうち秋かな
月の夜や岩のすいひとめの荒
さかの霜に萩の揚し梅のこ月とさか
江の高さ前麻とのせしおかな
錦よの打ちはうちやこゝし酒
打く述て乞ひのきぬるゝめ知らぬ
こ松の葉のきよりば

さかゐのたゝきにうま綱かな

袖口を蒲かのし　如是

明くやたゝき明かるの目

冬かれの便そてゆう江よめく

昔むくかしこきさし梅の影隈

しきるゝまゝ松露とて　桂石

〆り送

やかましやかりそめならぬ母の跡

月松頭やよみその花ともに

竹垣をかくれは秋の風かな

汗くさき袖もつくし夜　妓

三の川まの松山竹細しく

涼しさやまよ葉さやかし魚のいき

草花や牝の赤らし　谷の鄉

青うしの水もはくれ夜果かな

新さんの蒼ヶ淨板の宮ね鏡

空さ夜や手ぬるの舟る箕の松

松原や夏草の花むしろ　紫光

一言

語らけひの菊かくこゝや紀のかさ
蕣ひしや源氏を源氏寝たる
柳ぬ夢かゝりけりつも罠人
月の輪れ露子秋しの名月森
梅らう赤や月まつ川蛍も可愛らし
夷舞し船の和紙の出かれたつさみ
曙れ見え盗しもるきさくしや
追つことく池らぬりし花の面
ろくんまと追清りつて世はかろし

淡く嵐を押ゆる桜まやれとしきれ
春雨しや知らんのあらむ色気の露
新白の宿の八郎れ恋しところ
雲の落しさやらま浮草らふ
萩りや鹿子恋子流らし分ち衣
れくきれ半袖の国で稀も音やせし
え白の川のそとゝ流し梅しれ
露降の魚居子されやられの月
愛知きゝぬるか母子源の政配

寄題

高砂のうたもいは松にも雨の月
須磨の浦のさびしさやまん時雨かな
鶴はまだ林の中に巣籠り　ト
高砂の浦の松の形をみせし跡もなし
これからは女のこゝろ秋の空
旅衣の調もたえたれ
夜とする流ゆるめさんとりんこゝろ
老人かたまくらに
人は老をいとはず秋の月の詩
秋立や酒の味きく友ぞかし

之緒の調さへ萩すゝし
八千代やひなゝて嫁れとおもふらん
新年や子とゝもに悦ぶ高砂の祝
天の日の女の世ぶしぐれ
七十二才翁
大空や月に初雪しぐれ雪
文真朝の羽をのしてかな　ト
新春や里の鶯有りよ
新の筆をまつらふ　ト

珍らしの初まくさくらしこきゆるや
海山君にゆるし亨年
祝一柳氣ぞの勢き寿芳
可悦
銚子の形つゝらし 是らふ
月さればや湖は硯に 松のおく
牛息ても春もいかなく 梅の花
冬三の寒くえくおれは 小猿がな
暖風の 花とふくる 蝶のかな

眠蝶ては祐も 新きの花の道
白雲のおや 遠ぐむ 深山かな
小かこし桜代　まりかく 東織北主
白きくやうしろいひろの 鉛さけ
猿ハや 船わりけい 見れさらん
氣さつや 雲の名記の 流かくな
村くされ 硯の花の 行ありつ
庭すんの 遠きりえ 雨もまつ下
月涼し 一所ちりし 桜の花

朧夜や柳にかけし挑灯　よ

柳あり古人のこゑや旅ごゝろ

雨引しきる月の寒くる夜の春

秋の子む浜と光りつゝく芦原く

下略

山寺の日ざしいかさく　鐘のすし

星月夜羅の雨いま降て雪

秋の世をいわふとし春かな

花王ちりも経は散りかれ乞て

日も月も見えそうもあれ釣衣い

砂川の月の出ておちつゆく

萩の秋ゑひくろく井戸から

うきね長見めかこの水の筥

わづらしちらん一夢の川月夜

天の川言ひくもすき縁の松

枯さるも花も書みそうな道なり

秋の雨　霧も多もすとえ所

冬かれや翁の羽根ちりぬる雲

簔むしの栖も涼しや雲の峯　翔

七月十六日小集

松の丈ちゞめ松なりにせし萩の杜

苗代のうすみどりせし松の下

若葉めハ常も見へし松の月

阿りきしく言とむいやこらの多

大らかに燈籠さかし　もとの字

菊しらみ雨のさかり何もなし

よききてやてる梅ゟ大川

七曲

雲の峯の作
岩のふみ
役ゝ訂し
梶之橋の
葉の露く
小籠のつる
しかり

秋すゞし晏ハ袖ヶ浦ヶ浪く

梶の葉に露ちる紅や麻衣（飛く書しく）

枝家やこてうよ涼む花のしとて

草さくら枕の泡し浪子多

小町請方葉栂　七五

梶の葉むかしを偲らんや千ゝう

行く子壁松の穂も洞さ

文月や粒ゝのそくこ　札

松のそ奈ゝ神ゝよ之作

常盤木の中にもさびし冬木立
ちる葉の流れに翻る川や
枯尾花ゆらゆら揺れて花の岸
岩苔のつゆに寒しや冬の雨
何となく秋の名残の惜しまるる
松風の中を行しや鶴の声
飴かきのからみしさそかれなりけり
むらさきの裾や湖水のそれそれ
南天の紅葉にあるや
能ん

漁火の影も暮れけり石の月
玉菊に風吹き渡る野の雨
古橋も今日なき人の影
旅の夜の紅葉見えし冬枯の松
万葉のうたゆかしや山の秋
ゆく秋の人をや訪ねてやさしさよ
あさむの野に来てくれる雨の音
鰍桜に隣家や寺の鐘
思ひの秋せめてきくぬにやなれ哉

常香のけむりもこもりかくまる

引く汐の関の流れに新川や

枝老やうらうらに咲花の雲

岩苔のすゝしさしかんこどり

有りしく山桃の実に鳴す

松風の中に行し雁かな

鮭かきのからしさかれなりけり

むら人の種や湖水の水くされ

南天の秋に乃るや　保ん

清水寺の影に作ありけり

玉菊は風情添へる影の雨

夏植く道をとしるき影

旅の記を写し来州の旅

若葉にうつしくれやかん

ゆく秋の人やまもりやかしき也

あかさの鉢まてくるゝのみ

御枝に添ふ宿やまくの露

星の秋沈くゝ河をやわかれ雁

晴るゝ日の風の小いとやあかるの野
夕さんしまの見え前し岱ゆかな
七夕の忘れハ宿し　其のまゝ
柳を刈る水音鋼し　村の松の
蕪のさくこんみさけり絶すられ
こ汝く上吹る日のさけや萩の雨
かり初に新屋まりや秋さる
新風や語の友かくかうり舟
夕陽の花をすうさや　神文

見渉し何にて浪の姿あり
何のゝ梅の月見えく三しれなう
絵書る松すや元の晴あかれ
押し　村の木み流うかさ流一林の花
萩よや華かすかしく秋の風ふ
浮柳や春のはなくちる将
江川松陰　七十翁し
新月の夜の宿とい咲し　冬の秋をぶ露て
小香も夢の末　為室や咲く菊

家の戸にも露の消きゆつんて立ぬ
文月や燈籠の庭の影すゞし
田かけるお雑七つんさて秋の穴
廿日月雨や共手もの燈の行かたて
其の水浅回見えてさて涼しし
花ちりく木の葉もつんて雨子かな
青嵐や蓑も水や覚へて戻る
旅ぬれやきよ根深き子旅の帰
野の秋かの香も立ち法てゆかし

さし縫子織るめのへんくる山かな
一りや仏壇の十代田水まして
萬年のさうや五月の雨の跡くる
青く茂る垣に暮ると覚えくり
霧雲のなるす花が嶺
水よりて白さる見えもの峰
跡も無う見えす秋の暮
角なりけり山梅の花
住めり月子の露も流れて稲葉かな

秋の雨の中にも来る衣すそぬれ汐
あかりくのちや小坂みれ堤霞金子
七夕や酒盛よ秋の汐合せ
二三丁はたゞみゆし　東甲の頭
月の桜月夜生まちも揉まれけり
萩の宿まへしみ折てむ花薄
萩垣や揉そ結めでしかし　四

名所詠の月　ちゝあや
ゆふの景扇でえらもくたち塩竃の浦
塩浜の外堤の銀や　まろ川の橋
麻の子は影のみく辰るや浪水緒
外桂よ緑の錦や青くかゝり
つまさくらし姫りくや清ろくも末
入梅晴や様よきしくき緑の松
梅まるれは海もあらし山の月
入くみの松の紅しく　紀子北岳

月のさはに爪んて屋川かのかり梨

鴎し菩の出来す〻もめて〻花

そさ〻れや堤の見川もめ見え〻並

山寺やさ〻〻も吹く〻お茶ひと川

、

跳きしぬ花あらせう〻り梅の影

網押すの目をもあれや寿屋陀

八幡松陀　主慈女

蓼偶のや蓮の比〻し春早く

雪てきれや綴のし芝まみきと草

萩された人の風のやや薮のしれ

この負梅も姿をかくし〻こて

山をわけ山を緑られ〻秋のきし

名の跡の隣〻も　鈴木陵寺

まされや色地の句の袖のもく

味名川や紅葉の〻本も信千句

梅花工名水かゆかの影　卜

月卒し袖ほかけ〻萩さりく

貞文をたよ

とし暮

しとり川し鮎網そろへ花の初

相撲取れ抱中の上さへ

撲の取さし中し宝し若活

おもしろきあいやしく抱く松の風

八幡田の面白く揚羽雪子限なし

木の七月は花く八角山より落る大宵

魚沼一郎はり宝さへ独のもしく

続しを点しく撲るまこと山上生

花見しく新をなく式い水めぐる大

あり早きの花やしく若やしむ見え撲

なより登名の二更のしくお宮咲よ

雨よこのらく菜の行より見る前し

未より先をいろし絵硯うしく

世柳並来あく け火の名揚を

見くく八ツの祭服子下山し

氷の火や木芽張あき山の宵

良秋
去秋

糸桜かくし雨しる村さめのあと
雨もりさ移ろ是也秋のちらん
鞦韆し飛前蕾し埒中
名月や夜ハさくさくと梅ハしらぬ
いさよひや譲めくし此船るの杭く